

『タイムズ』の求人・求職広告にみる乳^{ウエットナース}母雇用の実態

中 田 元 子

はじめに

19世紀イギリスのミドルクラスにおいては母親による授乳が規範となっていた。医師の書いた育児書では、母乳哺育は自然の掟であること、母子双方の健康にとって良いことが力説されている。授乳できるにもかかわらず乳母に任せて授乳しない母親は、獣にも劣る存在であると非難され、さらには、いずれ子どもへの愛情を失うであろうと脅されている。(Bull 15-18; Chavasse 254-55, 289)しかし、実際には、出産時に母親が死亡したり、病気で授乳できない(あるいはできないと主張する)といった事態も多く、人工哺育が信頼できない状況においては、次善の策として乳母を雇用せざるをえなかった。たとえば、Gladstoneの日記やDickensの*Dombey and Son*には、母親が授乳できなくなった家族が経験する乳母をめぐる混乱や悩みが書き記されている。また、世紀半ばを過ぎてからも、未婚のまま出産した女性が乳母となることの是非をめぐる活発な議論がかわされていたことは、乳母の存在が日常的なものであったことをうかがわせるものである。¹ 19世紀後半には人工乳と哺乳器具が徐々にその安全性を高めていったが、それらが一般の人々の信頼を勝ち得るまでには時間がかかったので、その間乳母は身近な存在であり続けたと考えてよいだろう。

雇用者側の乳母に対する見方については、日記、手紙、医学雑誌、文学作品などにおける言及によってある程度知ることができる。しかし、もう一方の当事者である乳母自身はほとんど記録を残していないので、乳母として働くに

¹ Gladstoneは1842年、妻が第2子の出産後授乳困難に陥ったとき、乳母を雇うか人工哺育を選ぶか決断しなければならなくなった。医師から乳母の子の死亡率の高さを聞かされていたため、危険を覚悟でロバの乳を与える人工哺育することに決める(Gladstone 239, 247)。Dickensの*Dombey and Son* (1848)では、誕生と同時に母親を失った跡取り息子のために乳母が雇われる。第2章の乳母候補者の面接場面には、乳母についての当時の「常識」がうかがわれる。また、Dickensの妻Catherineは実際に乳母を雇ったことがある(Dickens, *Letters* 4:21; "New Letters" 77-78)。一方、1859年と1861年を中心に、未婚の乳母を雇用することの是非について、*Lancet*、*British Medical Journal*といった医学雑誌でActon、Routhらを中心に論争が繰り上げられた。

たった動機や境遇、雇用先での処遇についてどのように考えていたかなど、その実像はつかみにくい。本論では、乳母たちが記録に残した唯一の言葉ともいえる新聞の求職広告を手がかりにして、彼女たちが置かれていた状況への接近を試みる。

とはいえ、新聞の求人・求職広告は史料としては制限の多いものである。まず、たいてい2、3行ときわめて短く、最低限の情報しか含んでいない。そもそも、その広告の文句に事実が記載されているかどうか疑問でもある。しかし、短ければこそ、そこには要点が簡潔に記されていると考えることができる。また、たとえ広告文句が事実とは違うとしても、そこに選ばれた言葉は、乳母という職について乳母候補者と雇用主が重要とみなしていた条件を明らかにするもの、すなわち時代の価値の一端を明確に示すものであるということではできるだろう。そして、それらを、たとえば医師の書いた育児書など、雇用者側の規範的文献と併置してみることによって、乳母雇用の実態が立体的な形をもったものとして浮かび上がってくるのではないだろうか。

1. 乳母の求職広告件数

本論では19世紀にロンドンで発行された *Times* 紙に掲載された乳母の求人・求職広告を検討するが、広告文の分析にはいる前に、まず、同紙に出された求人・求職広告の数から19世紀の乳母雇用の推移を概観してみたい。新聞の、それも *Times* 一紙に出された広告の数が、実際の乳母需要をどの程度反映しているかはまったくわからない。そもそも、一世紀にわたる長期間には、*Times* の発行部数が大幅に増加し、それともなって求人・求職広告欄の役割や性格も変化したことを考えれば、広告掲載数は乳母需要の変化を正しく反映しているとはいいがたい。したがって、あくまでも一つの目安となるにとどまるが、こころみに調べてみることにする。調査したのは、*Times* の1801年から1896年までの5年ごとの、毎月最初の火曜・木曜・土曜に出された乳母の求人・求職広告件数である。各年36日分をサンプルとして調査したということになる。²

² 各年のあとの括弧内に *Times* の価格を記した。また、求人・求職広告件数のあとの括弧内の数字は、乳母候補者の既婚・未婚の別である。後の議論で必要になるので一覧に加えた。広告文にこの情報を含めていない場合は不明とした。なお、この表は拙論「リスペクタブルな未婚の母—ヴィクトリア時代の乳母をめぐる言説」(『ヴィクトリア朝文化研究』第1号、49～61、2003)に含まれる表を拡充したものである。

表1 *Times*における乳母の求人・求職広告件数（各年 36 日分）

年 (新聞価格)	求人広告件数 (既婚・未婚・不明)	求職広告件数 (既婚・未婚・不明)	総数 (既婚・未婚・不明)
1801 (6d)	0	0	0
1806 (6d)	0	3 (0・0・3)	3 (0・0・3)
1811 (6 $\frac{1}{2}$ d)	0	4 (1・0・3)	4 (1・0・3)
1816 (7d)	0	7 (1・0・6)	7 (1・0・6)
1821 (7d)	1 (0・0・1)	14 (1・0・13)	15 (1・0・14)
1826 (7d)	1 (0・0・1)	8 (2・0・6)	9 (2・0・7)
1831 (7d)	1 (0・0・1)	12 (7・0・5)	13 (7・0・6)
1836 (7d/ 9月 15日から5d)	0	17 (6・0・11)	17 (6・0・11)
1841 (5d)	4 (0・0・4)	42 (10・0・32)	46 (10・0・36)
1846 (5d)	2 (0・0・2)	31 (13・0・18)	33 (13・0・20)
1851 (5d)	5 (1・0・4)	40 (19・1・20)	45 (20・1・24)
1856 (4d)	1 (0・0・1)	99 (25・3・71)	100 (25・3・72)
1861 (4d/ 10月 1日から3d)	7 (0・0・7)	84 (29・8・47)	91 (29・8・54)
1866 (3d)	4 (0・0・4)	40 (12・4・24)	44 (12・4・28)
1871 (3d)	2 (0・1・1)	21 (4・2・15)	23 (4・3・16)
1876 (3d)	1 (0・0・1)	11 (2・1・8)	12 (2・1・9)
1881 (3d)	1 (0・0・1)	9 (4・1・4)	10 (4・1・5)
1886 (3d)	2 (0・0・2)	6 (2・0・4)	8 (2・0・6)
1891 (3d)	0	1 (0・0・1)	1 (0・0・1)
1896 (3d)	0	0	0
総数 (既婚・未婚・不明)	32 (1・1・30)	449 (138・20・291)	481 (139・21・321)

表1を見ると、1856年に求職広告件数および総数が最も多くなっており、ついで1861年も同程度に多い。これは、実際にこの時期が乳母需要の最盛期だったことを示していると考えてよいのだろうか。ここで、考慮に入れなければならないのは、スタンプ税、広告税、用紙税などの、新聞にかけられていた税金の推移である。これらは1712年に課税が始まって以来税率が引き上げられていき、1815年から1836年の期間に最高になった。その後、徐々に減税されて、1853年に広告税、1855年にスタンプ税、そして最後に用紙税が1861年に撤廃された。これによって新聞自体の価格も、1815年には7ペンスにま

で値上げされたものが、1836年には5ペンスに、1855年には4ペンスに、そしてすべての税金が撤廃された1861年には3ペンスに下がり、この後世紀末まで同じ価格であった。この減税は広告掲載料自体にも値下げという形で影響を与えただろうから、それに伴って乳母を含む求人・求職広告も増えていったであろうと推測できる。³ 実際、スタンプ税が一挙に3ペンス下げられ、連動して新聞価格も一時に2ペンス下げられたあとにあたる1841年、また、スタンプ税、広告税が撤廃されたあとにあたる1856年には乳母求職広告数が急増している。広告掲載料の高さを考えると、世紀前半に広告数が少ないからといって乳母需要が少なかったということはできない。広告掲載料に見合うだけの広告効果が得られないと考えて、新聞広告にはよらない求職方法によって仕事を得ていたかもしれないからである。また、同様に、1856年に広告掲載数が最高になっているからといって、必ずしも実際の乳母需要がこの時期に最も多かったということもできない。しかし、ここで思い出しておいてよいと思われるのは、1859年から1860年代にかけて、未婚の乳母を雇うことに関して議論が盛んだったということである。この背景には、実際に雇用されていた乳母の数が多く、社会問題化していたということが考えられるので、この時期の求職広告件数の多さは、ある程度現実を反映していると考えてもよいのではないだろうか。

次に、1866年以降乳母広告件数が急激に減少した原因だが、この間新聞価格には変化がなかったのも、広告掲載料が求職者たちに広告を出すのを控えさせるほど値上げされたとは考えにくいこと（実際、家事使用人全体の求職広告件数は減少していない⁴）から、乳母の需要そのものが減少したことが広告数減少の要因になっていたと考えてよいだろう。もっとも、*Times*でも1864年からGeneral Nursing Instituteという、乳母を含む各種 nurse (monthly nurse,

³ 荒井によれば、「当時ほどの新聞も広告料を企業秘密としていたため、広告料を示す資料はきわめて乏しい。1824年の資料によると、広告一件の平均コストは、ロンドンでは6シリング、地方では5シリングになっていた。この中には広告税（当時は3シリング6ペンス）が含まれていたもので、それを別にすると、それぞれ2シリング6ペンス、1シリング6ペンスになる」（69-70）。なお、*Times*では1895年8月22日から、広告欄に広告掲載料が示されている。それによると、求人広告欄は3行で3シリング、1行増えるごとに1シリング追加、ミドルクラス向けの求職広告欄は4行で3シリング、1行増えるごとに6ペンス追加、下層階級向けの求職広告欄は3行で1シリング6ペンスとなっている。

⁴ 参考までに、*Times*に掲載された家事使用人の求職広告件数の概数の推移を下に示す。これは各年1、2、3月の最初の火、木、土曜に出された家事使用人の求職広告件数をもとに、一日平均を算出したものである。

sick nurse) の派遣協会が広告を出していることをみると、他の求職手段が出てきたため個人的に新聞広告を出す必要がなくなった、ということも考えられないわけではない。しかし、以前から、新聞広告と並行して、医師や産院が乳母を斡旋するというような求人・求職手段も存在したので、⁵ 世紀後半の広告数の急激な減少ぶりは、他の手段への分散化が進んだというよりは、乳母そのものの需要が減少したことを反映しているように思われる。

なお、求職広告件数に比べて求人広告件数はつねに格段に少ない。その理由について考察することも必要だが、それは別の機会にゆずる。以下、本論では求職広告を中心に検討し、求人広告は補助的に用いることとする。

2. 乳母広告の文面について

当然のことながら、広告にはふつう有利な情報しか書かない。求職広告なら、職を得るために、自分がその職にいかにかさわしい資質の持ち主であるかを主張するだろう。しかし、仕事が必要な境遇にある人物が広告を出すために支払える金額は限られていたから、広告掲載料を抑えるために、限られた語数で効果的な広告文面を作ろうとしただろう。乳母求職者はどのような広告文句を出していたのだろうか。広告に頻出する文句を検討し、乳母にかさわしいと考えられていた条件を推定していこう。

(1) 乳母の健康状態

乳母が健康であるか、質のいい乳汁を分泌するかは、雇用主にとって一番の関心事であった。したがって求職者の広告文句には必ず"A healthy young person"、"Good breast of milk"などと、健康で乳の出も良いことを表す文句が

表2 Timesにおける家事使用人の求職広告件数概数

年	1831	1841	1851	1861	1871	1881
求職広告件数 (一日平均)	25.5	87.1	97.4	241.6	214.0	264.3

また、Deane と Cole によれば、家事使用人の数は 19 世紀を通じて増え続けている。1801 年には 60 万人だったものが、1851 年には 130 万人、1881 年には 200 万人になっており、人口の増加率(1881 年には 1801 年の約 2.5 倍になった)より急な増加率を示している (143, Table 31)。

⁵ たとえば、*Lancet* (Sept. 19, 1857) に掲載された Queen Charlotte's Lying-in Hospital の規約には、ベッド数、レジデントおよび助産婦志望者を受け入れることなどと並んで、"A list of healthy wet-nurses always kept."と、乳母の斡旋することが書かれている。

含まれていた。しかし、広告文句だけで乳母候補者の身体の状態を判断することはどういできるものではない。育児書では、乳母を選ぶときは必ず医師の判断を仰ぐように、と指示している (Combe 115; Bull 54)。これに応えるかのように、求職広告でも "Can give a medical reference." のように医師の証明書を提出できるという広告文句がしばしばみられる。しかし、たとえ医師の証明書があると書いてあっても、それが信用できるものかどうかはわからない。乳母候補者の健康と乳の状態を確認するためには、やはり雇用者が自分で信頼できる医師に検査を依頼するしかなかっただろう。したがって、広告に、健康で乳汁分泌良好と書かれていても、雇用主にとっては気休め程度にしかならなかったのではないかと考えられる。しかし、実体のない決まり文句で、それが必ずしも信用できるわけではなくても、もし当然書かれているべきその言葉が書かれていなければ、それはそのことだけで当の乳母候補者に対して不利に作用したかもしれない。健康で乳の出も良いというような文句は、実質的には何ら差別化の機能を果たさなかったと考えられるが、しかしそれはただ記載されていることに意味があったのである。

(2) 乳母の年齢

当時の育児書のなかには、乳母を選ぶときにはいろいろな点で母親に似た人物を選ぶように、したがって年齢に関しても、生みの母と年齢の近い乳母を雇うよう勧めているものがある (Combe 111)。しかし一方で、母親の年齢とは関係なく、乳母として望ましい年齢を示している育児書もある。この場合に勧められる年齢は、20-25 歳 (Chavasse 33)、21-30 歳 (Bull 56) と、上限には少し差があった。

いずれにせよ、年齢が雇用主の関心事であることは求職者も認識しており、年齢の記載がある広告が多い。今回調査した範囲では 449 人の乳母求職者のうち 195 人が年齢を記載している。その年齢は 18 歳から 32 歳にまでわたっているが、大半はおおむね医師が勧める範囲内に収まっている。医師が勧める年齢の範囲を過ぎる 30 歳以上になると、求職者側にも遠慮がみられる。

As Upper Nurse, a respectable woman, age 32, who thoroughly understands the management of the nursery. Or as Wet Nurse, having an infant of her own nine weeks old. Can give unexceptionable references.
(Nov. 6, 1841)

この求職者は、まず授乳しない nurse としての求職広告文を書き、あとから wet nurse もできることを書き添えている。wet nurse と dry nurse とでは給料に大きな差があったので、⁶ できれば wet nurse の職を得たいとは思っても、年齢の点から望まれないかもしれないと危惧していたことを示している。

(3) リスペクタブルであること

乳汁の質を証明することとは直接関係がないにもかかわらず、広告文中に頻出するのは"respectable"という言葉である。なかには広告文の最初の文句として使われている場合もある。これは他の家事使用人の広告文にもしばしば使われる言葉だが、実際にどのような人間なら respectable なのか、その実体は不明である。その語が具体的に何を意味しているのかははっきりしなくても、またその語が定義されたとして、実際にその通りの人間なのかどうかは別にしても、広告に使われているこの文句は、少なくとも、広告の主が、社会が重視しているものが何であることを意識していたことを示しているといえる。

respectability の実体はきわめて曖昧なものではあるが、乳母に限っていえば、respectable であると主張するためには、少なくとも既婚であることが必要だろう。乳汁を分泌するためには出産しなければならないが、妊娠出産が未婚者によってなされた場合、それはとりわけヴィクトリア時代にあっては respectable とは正反対の行為と考えられたであろうからである。実際、多くの求職広告に"a respectable married woman"という文句が使われており、この場合、その広告主の respectability は既婚であることが裏付けていると考えられる。ところが、そのような暗黙の了解を覆すかのように "As Wet Nurse, a respectable, young, single woman, age 24, with a good breast of milk." (Dec. 30, 1852) という広告が出てくる。⁷ single にもかかわらず respectable であるというなら、既婚であることを根拠とした respectability も宙に浮いてしまい、この語も最低限期待しえた差別化の機能を果たさなくなる。

確かに、未婚であることを明らかにしての求職広告は全体からみれば圧倒的に少数派であり、既婚であることを宣伝文句にしている求職者のほうがはるか

⁶ 求職広告欄を参考に給料を比較すると、たとえば、ある dry nurse 求職者が年俸 12 ポンドを要求している (Oct. 7, 1841) のに対し、wet nurse 求職者は週給 14 シリングを要求している (May 7, 1846)。wet nurse は始めから雇用期間が離乳までと限られているが、かりに一年間雇用されたとすると、年俸に換算して 36 ポンド以上になり、dry nurse の約 3 倍となる。

⁷ 未婚の乳母求職者は、調査した範囲では 1846 年から出てくる。

に多い(表1参照)。しかし、既婚であることを書いている求職者よりさらに多いのは、"a respectable Person"というように、既婚・未婚の別を記さない者である。このような表現を、未婚で出産したことを不道徳とみなす社会通念をふまえて、未婚であることを隠しているものとみなせば、未婚の母の乳母求職者が非常に多かったということになる。

既婚・未婚の別が乳母の採用に際してほとんど意味を持たないことを裏付けるかのように、乳母を求める求人広告においても、とくに既婚者であることを指定しての求人はほとんどない。そもそも求人広告自体数が少ないが、求職広告と同じ期間のあいだに出された求人広告 32 件のうち、既婚者を指定しているものは1件しかない(ちなみに、既婚・未婚の別を指定しているもう1件は未婚者を求めている)。求人者は、現実には、乳母候補者の既婚・未婚の別にこだわるよりも、とにかくできるだけ早く、目の前の赤ん坊の飢えを満たす乳を得たいと考えたのだろう。

これらの広告文句が示しているのは、時代の風潮からして、だれもが respectable と認める既婚の乳母を求める雇用者が多かったであろうという推測に反し、意外にも未婚の乳母の需要があったということである。

(4) 未婚の乳母あるいは夫の不在

ではなぜ未婚の乳母が求められたのだろうか。このことについては、以前、家父長制の枠外に位置する未婚の母のもつ利点という観点から論じたことがあるが、ここでは別の可能性について考えてみたい。⁸

授乳に関する古くからの迷信に、性交渉は乳を損なうというものがあった(Pollock 53)。また、もし妊娠した場合、妊婦の授乳は養い子にとって危険とみなされることもあった(Smith 79)。Fildes は、この2世紀の医師ガレヌスに由来するといわれている禁忌は、イギリスではそれほど強いものではなかったと述べており(104-05)、これらの迷信に基づく禁欲の慣行は18世紀には廃れていたともいわれている(Stone 270)。しかしPerryによれば、同世紀の医師のなかにすら完全に迷信として打ち捨ててはいない者もおり、表立って節制の必要を主張しない医師でも、性交渉後数時間は授乳を控えることを勧めたりしていた(131)。Mary Wollstonecraft は *A Vindication of the Rights of Woman* (1792)において乳母による養育に反対しているが、乳児の父親が妻との性的

⁸ 注2に記載の拙論参照。

な関係を望んでいることが乳母養育がなくならない大きな原因であると考えている。

[T]here are many husbands so devoid of sense and parental affection that, during the first effervescence of voluptuous fondness, they refuse to let their wives suckle their children. (169)

18 世紀後半において、知識人のなかにすら性交渉が母乳に悪影響を与えるという言い伝えを信じている人がいたことを示すものである。

19 世紀の育児書にはこのような迷信めいた考えについての言及はないが、長年にわたって言い伝えられてきたこの禁忌が人々のあいだに根強く残っていたことは十分考えられる。この迷信を気にかける雇用者が、我が子に汚れた乳を飲ませる危険を回避するために、日常的に性的関係を持つことはないと前提できる未婚の乳母を選択するということがあったかもしれない。

乳母求職者のなかに、既婚ではあっても"Husband from home"、"Husband abroad"などと、わざわざ夫と一緒に住んでいないことを書いている者がいるのも、この迷信が残存していたからではないだろうか。これは、未婚のまま出産という不面目な行為はしていないが、夫という雇用主の心配の種になる存在も近くにはいないということをほのめかして、既婚の乳母、すなわち常識的な意味で *respectable* な乳母を雇いたいが、かといって夫がいるのは心配だという雇用主のジレンマをくみとった広告文句であるといえる。

(5) 乳母の子について

広告文中には "Child five weeks old." "Baby three weeks old." などと乳母の子どもの月齢の記載がある。⁹ しかしこれは雇用者が乳母の子どもに関心を抱いていることを反映しているわけではない。雇用者にとって問題なのは、実質的には同じこととはいえ、厳密に言えば、乳の月齢なのである。というのも、育児書において、乳の成分は子どもの成長に応じて変わるので、出産時期が近い乳母を雇うように勧められており (Combe 111)、この情報が便宜上乳母候補者の子どもの月齢によって知らされているのである。しかし、結局問題なのは

⁹ 調査した広告のなかで、一番幼い赤ん坊は生後 1 週 (Jan 6, 1876)、一番年かさは 8 か月 (May 2, 1871) であった。また、最も記載の多い月齢は、生後 2 週から 3 か月までである。

乳の月齢であることをあからさまに示す雇用主側からの次のような求人広告もある。"Wanted, a young woman, as WET NURSE, in a small family, who has a breast of milk from two to six months old." (Feb. 7, 1861) また求職者のなかにも、自分の赤ん坊の月齢を記して遠回しに乳の月齢を示すのではなく、端的に "Milk a month old." (Feb. 2, 1861) と書いている者がいる。乳母市場において、乳母の子は単に乳の月齢を示す単位のようなものとしてしか認識されていないのである。

医師のなかには、長期にわたって授乳しても乳質は悪くならないので、月齢が同じ乳でなければならぬことはない、と言う者もいたが (Wickes 418-19)、多くの求職広告に、出産時期、子どもあるいは乳の月齢が書かれていることは、雇用者がこの条件を重視していたことを示している。

赤ん坊の月齢とともに、何番目の子であるかが書かれることがある。そうしたとき圧倒的に多いのは、第一子であると書かれている場合である。何番目の子であるか明記されている広告 109 件のうち、第一子と記載されているものが 98 件を占める。育児書のなかには、すでに子どもがいる乳母の方が乳量が多いうえ、赤ん坊の扱いにも慣れているので好ましいと書いているものもあるので (Bull 56)、このような第一子への偏りは目をひく。なぜ第一子であることが宣伝文句として有効だったのだろうか。

ひとつには、あらゆる点で母親と似ている乳母を雇うようにという育児書のアドバイスにヒントがあるように思われる。初産の場合、乳汁の分泌が悪いことが多いため、乳母を雇おうとした母親は初産の場合が多かったことが推測される。そのため、自分の子どもと同じ第一子を持つ乳母を雇おうとする母親が、第二子以降の子どもに乳母を雇おうとする母親より多かつたのではないだろうか。富裕階級の母親より下層階級の母親の方が授乳時に困難を経験しないことは、育児書でも指摘されている (Combe 82; Chavasse 28)。

また、もうひとつの理由としては、乳母候補者が未婚の場合、赤ん坊が第一子であれば、不道德な行為の「初犯」ということになり、許容の範囲内であると考えられたこともあるかもしれない。この考え方は、未婚の乳母の雇用を推進していた Acton も共有するものであり、彼は、一度だけ過ちを犯した女性のみを救済の対象とみていた ("Unmarried Wet-Nurses" 176)。

さて、育児書によれば、"the surest test is that afforded by the state of the nurse's child" (Combe 116) と、乳母の乳の善し悪しを知るためには乳母の子を

見るのが一番であるとされている。¹⁰ 丸々と太った健康そうな赤ん坊を連れていけば、その乳母は乳量も豊富であろうと推測される。したがって、"Apply, personally, with infant" (Dec. 3, 1881) というように、赤ん坊を連れて面接に来るよう指示を出している雇用主もいる。赤ん坊が採否を決定する重要な条件になるとあって、他人の健康な赤ん坊を借りて面接に行った例もあるようだ。

このように、赤ん坊が乳母選考にあたって有力な判断基準になるのであれば、子どもが亡くなっている候補者は、重要な判断材料を欠くという意味で不利なはずである。しかし求職広告のなかには、わざわざ子どもは亡くなったと書いてあるものが少なからずみられる。また、"without encumbrance" という表現によって、足手まといになる子どもがいないことを宣伝文句としているものもある。一方、求人側にも "Any one having lost her own infant would be preferred." と、子供を亡くした乳母を求める広告を出している者がいる (Nov. 2, 1841)。

これは、雇用者側が、乳母としての適切さを判断する材料になる乳母の子どもを検査できないことの不都合さより、乳母自身の子がいないために乳母が雇用者の子の授乳に専念してくれることを重要とみなしたことによると考えられる。また、はじめから乳母の子が亡くなっていけば、Gladstone が妻の授乳困難時に乳母を雇うという選択肢を却下した理由である罪悪感—自分の子のために乳母の子を犠牲にすることになる—に苛まれずにすむということもある。

乳母の子を犠牲にするという罪悪感を逃れたいという思いは、子どもを亡くした乳母を雇おうとする傾向を導くとともに、また、未婚の乳母を選択させることにつながった可能性もある。すなわち、雇用主が、未婚の乳母は非嫡出子の生存を強いて望まないに違いないという先入観をもっていたとすれば、未婚の乳母を雇った方が万一自分の子の授乳期間中に乳母の子が亡くなったと聞いても罪の意識を感じる事が少なくすむと考えたかもしれないからである。¹¹

(6) 雇用場所

乳母の求職広告を年代順にみると、その雇用場所に変化があったことがわかる。すなわち、乳母が自分の家に引き取って育てる例が減って、雇用者の家に住み込んで授乳にあたるのが標準的な雇用形態になっていったということであ

¹⁰ 同様のアドバイスは Chavasse 33, Bull 56 にもある。

¹¹ George Moore の *Esther Waters* (1894) では、このようなミドルクラスの身勝手な思い込みが未婚の乳母によって痛烈に批判されている (150-51)。

る。たとえば、19世紀前半には、"A respectable married woman wishes to take a child to wet or dry nurse, in an airy situation." (Oct. 6, 1831) という広告にみられるように、自分の家に引き取って育てるため、自宅の環境の良さを書くことがしばしばあった。しかしこのような広告文句は年を経るにつれて少なくなり、1871年以降はまったくなくなる。

これは、雇用主が、我が子を都市にある自宅から郊外の乳母のもとに出して、環境の良いところで育てることを優先させることから、環境の悪い都市内であっても、自分で監督できることの方を優先させるようになったことによると考えられる。自分で授乳しなくても、乳母を監督することが母親としての務めを果たすことになると書いた育児書もあった (Buchan 4)。

(7) 乳母以外の仕事の許容

乳母として雇用されることを望む広告にもかかわらず "Good needlewoman" と、針仕事ができることを書き添えているものがある。もともと、授乳しない nurse には、子供服の仕立てができることが求められることが多く、したがってそれらの広告にはこの文句が使われていた。それが、19世紀半ば以降、乳母の求職広告にも表れるようになるのである (調査範囲での初出は Oct. 7, 1856)。また、同じころから "Thoroughly domesticated" という文句もみられるようになる。授乳以外にも家事全般に通じていると主張して、自分に付加価値をつけ、他の乳母候補者との差別化をはかったものと考えられる。また、このような広告文句が出てきた背景には、人工哺育の安全性が徐々に高まり、必ずしも乳母が必要ではなくなったこともあっただろう。同時期には哺乳瓶の宣伝も盛んに出されていた。もはや乳母どうしの競争ではなく、乳母と人工哺育との争いになっていくのである。¹²

おわりに

新聞広告だけでは、全体としてどのくらいの乳母需要があったのかはわからない。しかし、調査期間の一世紀を通じてみると、ある程度の傾向は浮かび上がってくる。19世紀の前半には広告掲載料が高かったので、この時期の

¹² 1850年11月29日、求職広告欄の直前の欄に、フランスから輸入された哺乳瓶 Biberon の広告が出た。これは翌年2月18日から、*Lancet* (Feb. 15, 1851) の推薦文を引用して *Times* に広告を出し続ける。乳母の求職広告は、その緊急性の高さから求職広告欄の一番はじめに掲載されていたから、その直前の哺乳瓶の宣伝と一騎打ちの様相を呈することになった。

広告掲載数の少なさをそのまま現実の乳母需要の少なさと考えることはできないが、1856年から1861年ごろをピークにしてのその後の求職広告件数の急速な減少は、実際の乳母需要の急減を反映しているものと考えられる。

そもそも、新聞広告によって乳母としての仕事を捜そうとするのは効率の悪いことだったかもしれない。広告を出す手続きをしてから、それが新聞に掲載され、雇用主から連絡があるまでに時間がかかるので、¹³たとえば求職者が子どもを亡くしている場合は、待っているあいだに乳の分泌は悪くなる。雇用主の方も、広告を見て乳母に連絡をつけたときには、すでに別の家庭に決まっていた、ということがありえた。また、広告に書かれた文句、「リスペクタブルで健康な乳母」「豊富な乳量」はしばしば看板に偽りありだったかもしれない。このような不確定要素を考えると、新聞によって乳母の求人・求職をするのはあまり効率的なことではなかったのではないかと推測せざるをえない。もっと確実なのは、知人、医師、産院、職業紹介所などに紹介を依頼する方法だっただろう。

しかし、新聞広告は、乳母雇用の実態を推測するにあたって、医学的言説と実際の慣行とのあいだの違いを明らかにし、育児書の記述を補完するものとしての役割を果たしている。医師などの指導が、ミドルクラスの乳母雇用者たちにそのまま受け入れられていたわけではないことが、乳母の出した求職広告から推測できる。未婚の母という、fallen womanと紙一重の存在がrespectabilityを重んじるミドルクラスの家庭に入り込むことを許される一方で、医学的には否定されていた、性交渉が乳に悪影響をもたらすというような迷信が、依然として一般の人々に影響を与えていたらしいこともわかる。

乳母の求職広告の文句は、歴史上に残したというにはあまりにもささやかな記録であって、そこから乳母たちの生活ぶりや思いを想像するのは難しい。また、読み書きのできない乳母候補者が他人に頼んで広告文句を作ってもらったとすれば、それは乳母の言葉とすらいえないかもしれない。しかし、そのごく簡潔な文句は、ときに、規範的言説が決してふれることのない、乳母雇用をめぐる生々しい現実を垣間見させる雄弁さをもっているのである。

*本稿は平成15年度筑波大学学内プロジェクト研究からの助成を受けた研究（奨励研究「19世紀イギリスの新聞広告にみる乳母雇用の実態」研究代表者

¹³ Timesの場合、広告が掲載されるまでに一週間待たされることもあったという（荒井68-69）。

中田元子)の一部である。また、ヴィクトリア朝研究会(2003年9月7日、成蹊大学)において『タイムズ』における乳^{ウェットナース}母の求人・求職広告」という題目で発表した原稿に加筆し、訂正を施したのものである。なお、本稿では、「乳母」という語はもっぱら wet nurse の意味で用いている。人工哺育をする dry nurse や幼児の養育係としての nurse に言及するときはそれと区別して示す。

参考文献

- Acton, William. "Child-Murder and Wet-Nursing." *British Medical Journal* 16 Feb. 1861: 183-84.
- . "Unmarried Wet-Nurses." *Lancet* 12 Feb. 1859: 175-76.
- 荒井政治『広告の社会経済史—イギリスの経験』東洋経済新報社, 1994.
- Buchan, William. *Domestic Medicine: or, a Treatise on the Prevention and Cure of Diseases by Regimen and Simple Medicines*. New York: Garland, 1985. (Marriage, Sex and the Family in England, 1660-1800) Reprint. Originally published: 2nd ed. London: Printed for W. Strahan, 1772.
- Bull, Thomas. *The Maternal Management of Children*. 13th ed. London: Longmans, 1875.
- Chavasse, Pye Henry. *Advice to a Wife on the Management of her own Health; and on the Treatment of some of the Complaints Incidental to Pregnancy, Labour, and Suckling with an Introductory Chapter Especially Addressed to a Young Wife*. 1839. 11th. ed. London: J. and A. Churchill, 1875.
- Combe, Andrew. *The Management of Infancy, Physiological and Moral Intended Chiefly for the Use of Parents*. 10th ed. Rev. and Ed. James Clark. Edinburgh: Maclachlan and Stewart, 1870.
- Deane, Phyllis, and W. A. Cole. *British Economic Growth 1688-1959: Trends and Structure*. Cambridge: Cambridge UP, 1962.
- Dickens, Charles. *Dombey and Son*. 1848. Ed. Peter Fairclough. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- . *The Letters of Charles Dickens*. 12 vols. Ed. Kathleen Tillotson et al. Oxford: Clarendon, 1977-2002.
- Fildes, Valerie A. *Breasts, Bottles and Babies: A History of Infant Feeding*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1986.
- Gladstone, William Ewart. *Gladstone Diaries 3 (1840-1847)*. Ed. M. R. D. Foot

and H. C. G. Matthew. Oxford: Clarendon, 1974.

Moore, George. *Esther Waters*. 1894. Ed. David Skilton. Oxford: Oxford UP, 1995.

"New Letters of Mary Hogarth and her Sister Catherine." *The Dickensian* 63 (1967): 75-80.

Perry, Ruth. "Colonizing the Breast: Sexuality and Maternity in Eighteenth-Century England." *Forbidden History: The State, Society, and the Regulation of Sexuality in Modern Europe: Essays from the Journal of the History of Sexuality*. Ed. John C. Fout. Chicago: U of Chicago P, 1992. 107-37.

Pollock, Linda. *A Lasting Relationship: Parents and Children over Three Centuries*. Hanover: UP of New England, 1987.

"Regulations of Queen Charlotte's Lying-in Hospital." *Lancet* 19 Sept. 1857.

Routh, C.H.F. "On the Selection of Wet Nurses from among Fallen Women." *Lancet* 11 June 1859: 580-82.

Smith, Hugh. *Letters to Married Women*. London, 1767. 2nd ed. London, 1768.

Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage in England 1500-1800*. Abridged ed. New York: Harper, 1979.

The Times. Classified Advertisements. 1801-1896.

Wickes, Ian G. "A History of Infant Feeding." *Archives of Disease in Childhood* 28. 1953.

Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman* 1792. Ed. Miriam Brody. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin, 1992.